

粽はそのまゝに見るいとすゞしくときたるほど、飯の匂ひ又おかし、水無月の朔日は水餅とてやごとなき上つがたにも、もてはやし給ふに、草葉もよらるゝ、土用の比水餅の鍋鉢にうかび出たるぞ、上戸のしらぬすゞしさなりけり、風も文月の音づれして、七夕のあふ夜はみきのみ奉りて、子のこの餅もまいらせぬは、葛餅のうらみながら、その鵲のはしとよみしも、やかもちときけばゆかし、魂まつりも團子におくりすて、お萩の花に秋もたけてこもちもち月の團子より、栗の子餅の節句も過れば、十月はもとより亥の子の餅に、荒初て、時雨こがらしの寒きまとゐに、火鉢のもとのやき餅も、おもしろき時節なるべしや、御佛事のもちる始る比つもある粉雪ももち雪も、あられも酒の名のみにはあらず、おとごの餅は、朔日にいはひて、師走はなべて餅の世界なれば、あけてもいふべからず、さればよいかなれば、詩人は酒のみ友にかぞへ入れて、李杜が筆にも餅の沙汰はなけれど、兩部習合の俳諧には、劉伯倫がのみぬけも、夏爐亭の餅すきなるも、ともに俳諧の趣向なれば、我門には上戸もめでたく、下戸も猶めでたし、

〔書言字考節用集服六〕雜煮

〔倭訓栞中編九〕ざふに 餅に種々の菜と肴を加へ、煮てあつ物とし、年始に祝ふを雜煮といふ、畿内に又かんともいふ、羹也、浪合記に、尹良親王の御子、良三王賊のために危ぶめられ、津島に移りたまひし時、永享八年正月元日の雜煮を奉るに、蛤を吸物にして酒を進め、まゐらせ、糲飯に大根の輪切の汁物、たつくり鱈を調じける、此年よりめでたかりしかば、津島の四家七黨より始て、此ならはし尾州濃州勢州の俗となれりとぞ、

〔貞丈雜記飲六〕一雜煮の本名をば、ほうざうと云也、或人の説に曰く、饅モチャイは氣を益、中を暖め、小便を縮め、大便を堅する功能あり、本草綱目に見へたり、されば臟腑を保養する心にて保臟と云也、又しよこんと云は初獻也、饅を煮て先一番に初獻に進する事、臟腑を保養する爲也、扱次に二獻三